近現代中国におけるキリスト教と女性

——鄧裕志の生涯を事例として——

石川照子

はじめに

本稿の目的は、鄧裕志という一人の中国人クリスチャン女性の生涯を通して、近代中国におけるキリスト教と女性との関わり、そして社会主義中国におけるキリスト教といった問題を考察してゆくことにある。

中国近現代史研究において、キリスト教研究は長い間周辺的位置に置かれてきた。それは中華人民共和国成立以降、キリスト教が「帝国主義の手先」としてその歴史的役割を規定されてきたことに起因しており、文化大革命時代には、キリスト教は旧文化を象徴するものとして激しい弾圧に遭ったことは周知の通りである。結果として中国において、近代中国の各種キリスト教運動に対してはおしなべて低い評価が与えられ、その限界や「帝国主義的性格」等が強調されることになったのである。こうした傾向は日本の研究にも少なからず影響を与えたと思われる。日本の中国キリスト教研究というと、従来前近代を中心としたキリスト教宣教史がその主流であり、それはそれで多くの成果を挙げてきた。しかしより広範な問題、特に現地中国の社会や人々の側はキリスト教をどう受容し、それによって自身の主体的活動をどのように展開していったのかといったことに関しては、十分な研究がなされてはこなかったといえよう。

そうした中で八〇年代を迎えて、中国でもキリスト教に対する再評価と研究が始まり、九〇年代以降はキリスト教

が歴史的に果たした役割を多様なテーマについて客観的、多面的に再検討していく作業が本格化していったのである。後に詳しく述べるが、現在中国におけるキリスト教研究は、その研究組織も拡充され研究テーマも広がり、着実に進展しつつある印象を強く受けるのである。

そしてその中で、キリスト教と女性の問題も研究の重要なテーマとして認識されている。本稿で取り上げる鄧裕志は、YWCAで労工事業を中心とした活動を行い、日中戦争中は抗日運動にも参加し、人民共和国成立後はYWCAおよびキリスト教界の指導者となった人物である。その鄧の長い生涯を女性史、ジェンダーの視点から具体的にたどることは、中国におけるキリスト教とその運動を再検討してゆくことにもつながるのではないだろうか。

一　キリスト教と近代中国

(一)　研究状況

近代中国においてキリスト教が果たした役割に関する客観的かつ本格的な研究が始まってから、それほど長い年月がたってはいないものの、現在までにすでに多様なテーマの研究成果が現われてきている。ここではまず中国における研究の現状を簡単に紹介してから、キリスト教が近代中国社会に具体的にもたらしたものについて見てみたい。

現在、国家機関の研究部門としては中国社会科学院の世界宗教研究所に、キリスト教研究センターが設置されている。八〇年代以降先駆的にキリスト教研究に着手した一人が、中国近代史研究の泰斗である華中師範大学の章開沅である。章は特に中国教会大学（ミッションスクール）研究の分野を切り拓き、同大学内に中国教会大学史研究センターを設立し、『基督教与中国文化叢刊』（湖北教育出版社発行の定期刊行物）の編集も担っている。そして中国教会大学図文集の編纂等を通して、中国と西洋の文化交流の産物として教会大学を位置付け、その社会貢献等の特性を客観的・全面的・科学的にとらえてゆくことを主張している。[1]

また、この華中師範大学中国教会大学史研究センターは、前述の中国社会科学院のキリスト教研究センターも共催単位となった「基督教の中国伝来と中西文化交流」というシンポジウムを、二〇〇〇年八月に武漢で主催しているが、これはキリスト教と中西文化交流というテーマのもとに中国のキリスト教史研究者が集った全国で初めての会合であったという。[2] そして中国人宣教師、カソリックの本土化、抗戦期のキリスト教大学、教会学校と近代中国図書館事業等のテーマが報告されている。このようなキリスト教をテーマとしたシンポジウムは後述の通り、他にも活発に

行われているようである。

さらに研究書も多数刊行されており、そのすべてを挙げることはできないが、顧長声、顧衛民、陶飛亜らの研究や、「基督教与中国研究書系」（上海古籍出版社）という叢書類等、研究の多元化・細分化が進んでいる。[3]

(二) 社会事業の展開

西欧文化の核心であるキリスト教の東アジア近代への移入は、近代化・西欧化と共に、当該地域の植民地化を促すこととなったことは事実である。中国でもキリスト教と宣教師は「帝国主義の先兵」として、時に激しい攻撃の矛先を向けられたり（「教案」の発生等）、キリスト教の中国化が試みられたりした（「本色化運動」）。しかし同時に、人道主義と国際主義という特質を備えたキリスト教は、現地において貧民救済の慈善事業や社会改良活動、学校設立、出版事業といった社会事業を積極的に展開して、その社会の改良と変革に大きな貢献をしたこともまた事実である。キリスト教を評価する際には、こうしたキリスト教のもつ両義性を十分認識した上で、その歴史的役割を実証的にとらえなくてはならない。[4] 以下、キリスト教の行った社会事業を具体的に見てみたい。

すでに明・清時代のカソリック伝道により、中国におけるキリスト教伝道は本格的に行われるようになっていたが、アヘン戦争による開国によって新旧キリスト教団の中国進出は一段と加速化し、宣教師たちは続々と中国の沿岸都市から奥地へも入って行くようになった。そしてその際に、宣教師たちは西洋の科学技術や知識を布教活動の助けとして中国に伝えた。特に義和団事件後に、教会やキリスト教団体の社会事業は大変活発化し、印刷・出版事業、学校・病院設立、博物館・図書館・ラジオ放送局の開設、慈善事業・社会改良運動の展開と、その活動は多岐にわたっていた。そして後発のプロテスタントの方が、カソリックより熱心にこうした事業に取り組んだと言われている。

一八六〇年以降各教団の内陸進出における重要なセンターとなった上海は、こうしたキリスト教系社会事業の展開の一大拠点となっていた。[5] 印刷・出版事業について見ると、一八五〇年に上海郊外の青浦蔡家湾のカソリック孤児院での木版印刷から始まって、その後印刷技術は急速に発達し、出版物もキリスト教関係のものから新聞や教科書、西洋の社会制度や科学技術に関する翻訳書や一般書籍へと広がっていった。そして一九九五年までに刊行された新聞・雑誌はカソリックで四一種、プロテスタントで二八一種を数え、[6] 一八六八年にプロテスタントのメソジスト教会の宣教師だったヤング・ジョン・アレン（林楽知、アメリカ人）によって創刊された『万国公報』（当初の名称は教会新報）のように、世界の時事をはじめ西洋の科学知識や

政治論説の記事を掲載して多くの読者を獲得し、変法派等中国の思想界にも大きな影響を与えたものもあった。

また、近代的学校・病院の設立は、租界と華界に複雑に分断された上海においては先駆的取り組みとして重要な役割を果たしていた。早くも一九世紀の半ばには教会学校が誕生し、当初の最下層の子弟を対象とする慈善事業的な初等教育は、やがて中学校、大学へとその規模を拡大し、学生たちも裕福な家庭の出身者が増えていった。そしてカリキュラムにおいて聖書等宗教教育が重視されたのは当然であるが、英語、算術、化学、物理学といった科目によって近代的知識が学生たちに伝えられたのであった。大学はカソリックでは震旦大学、震旦女子文理学院、プロテスタントではセント・ジョン大学（聖約翰大学）、滬江大学、東呉大学法学院、三育大学、上海基督教女子医学院がある。病院も一九世紀半ばの医療伝道から始まり、現在まで続いている仁済病院[7]のような近代的医療機関として発展していった。

その他、中国で最初の自然博物館である徐家滙博物院（一八六八年にカソリック神父が創設）や大学・団体・出版社の図書館、上海福音放送局（一九三三年にプロテスタント系の出版機関である広学社のビル内に設置）が開設されている。慈善事業・社会改良運動としては、孤児院が一九世紀半ばから次々に設けられ、上海最初の孤児院で国内最大のカソリック孤児院であった土山湾孤児院では、子供たちが技術を学んで宗教画や家具、食器等を製作していた。また不纏足運動や、妓女たちを収容・教育する教養院や習芸所の設置、アヘン禁止を主張した拒毒運動（一九二四年に設立されたプロテスタント系の中華国民拒毒会が中心）といった社会改良運動も積極的に取り組まれていた。

二　女性とキリスト教

(一)　研究状況

前章で述べたように、現在中国におけるキリスト教研究はその広がりを増しつつある段階であるが、キリスト教と女性に関してもさまざまなテーマの研究が進展している。特に女子教育については、中国でも日本でも最も研究が進んでいるテーマであると言えよう。[8] アメリカの研究では、アメリカ系ミッションや宣教師の中国における布教と活動に関して、多くの研究がなされている。[9]

こうした中で二〇〇五年五月に上海大学で開かれた「ジェンダーと歴史――近代女性とキリスト教」というシンポジウムは、キリスト教と女性研究において、大変重要な会であったと思われる。これは中国の史学界として初のジェンダー研究とキリスト教史をテーマとしたシンポジウ

ムで、文献・資料研究、社会組織と社会運動、女子教育、女性宣教師、女性クリスチャン等に関する報告がなされた。[10] 具体的には、英米の研究史、キリスト教女性雑誌、YWCAの女工夜間学校と農工事業、女子神学教育、外国人女性宣教師、福州の女性クリスチャン、女性教育者の呉貽芳などが取り上げられている。挨拶を行った卓新平は、中国伝道における女性宣教師の重要性、女性宣教師と女性クリスチャンの中国女性解放への貢献、キリスト教と中国の社会・文化との結合における女性クリスチャンの役割を指摘している。これらの指摘は、近現代中国のキリスト教研究における女性史、ジェンダー史からの分析が不可欠であることを、端的に示唆しているのである。

(二) 反纏足運動と女子教育

すでに見たように、近代中国においてキリスト教が行った社会事業は中国社会の改良と変革に大きく貢献したが、それは必然的に女性たちの状況を劇的に変えることとなった。不纏足運動に最初に着手したのはキリスト教の宣教師たちであった。女性のための病院等近代的医療衛生機関の設置は、女性の身体と衛生を改善しただけでなく、アメリカで医学を学んだ金雅妹のような女性も生み出した。教会学校は清朝政府の女子教育制度の導入より遥かに先んじて、各地に学校を設立して近代的女子教育を始めた。そして女子教育の普及は、女性の職業化・社会進出を促し、女性の解放に大きく貢献したのである。ここでは社会改良運動の一つである反纏足運動と、女子教育について見てみたい。

幼少時に女児の足のくるぶしから下を縛ってその成長を止めた纏足は、歩行を困難にしただけでなく、女性の日々の行動も制限することとなったが、この風習は千年以上も続いた。[11] しかし清末になって欧米から「男女平等」や「女権思想」がもたらされ社会改革の気運が高まり、こうした状況の中で反纏足運動は展開されたのだが、最初にその口火を切ったのは当時中国に滞在していたキリスト教の外国人宣教師たちであった。一八七五年に『万国公報』に載った文章をきっかけに野蛮な風習であるとして纏足批判が巻き起こり、九五年にはイギリス商人の妻のリトル夫人が「天足会」を設立した。

やがて運動は留日中国人学生たちにも広まり、康有為、梁啓超、譚嗣同ら変法派の男性知識人たちによって頂点に達したが、そこでは反纏足が富国強兵とそのための女性の「国民化」に結びつけられていた。それは彼らが外国人宣教師たちのまなざしを強く意識して、纏足を「国粋」から「国恥」へと転換して、彼らのナショナルな言説での醜さの象徴に女性の身体が使われたからであるという指摘が、坂元ひろ子によってなされている。しかし身体変工を余儀

なくされ、時代の要求の変化に翻弄され、苦しめられた女性たちが自立する契機を最初に与えたという意味において、外国人宣教師たちの始めた運動の意味は大きかったと言えるだろう。

次に女子教育について見てみたい。[12] 当初女性たちへの教育を主に担ったのは、男性宣教師の妻や女性宣教師たちであった。その目的はキリスト教布教達成のために、中国の女性たちに聖書を読める識字能力を備えさせることにあったが、早くも一九世紀半ばには女子学校が設立されていた。それは清朝政府が一九〇七年に「女子小学堂規則」と「女子師範学堂規則」を公布して、正式に女子の学校教育制度が導入されたのより半世紀以上も前のことであった。中国最初の教会女子学校は、一八四四年にイギリスの東方女子教育協進社のアルダーシー女史が設立した寧波女塾である。その後各地の教会のあるところには教会運営の学校が次々と建てられて、一九三四年には女子中学は一〇二カ所で、その初級・高級女子中学生は併せて九八〇九名を数えたという。[13]

これらの学校は当初布教の助けとして運営され、教会の仕事を支える女性や良妻賢母を育成することがその目的であった。しかし、例えば宋家の三姉妹を卒業生にもつ上海の名門学校であった中西女塾（設立者はヤング・ジョン・アレン）のカリキュラムを見てみると、聖書、国語（中国語）、英語、歴史、算術、地理、生物学、化学、物理学、天文学、衛生学、フランス語等が設置されており、[14] 教会女子学校はこうした近代的な新しい知識を身につけた女性たちを多数輩出したのである。

そして女子高等教育についても、官立大学に先んじて教会立大学が開設された。最初の教会女子大学は一九〇五年に創設された華北協和女子大学で、さらに華南女子大学（福州）、金陵女子大学（南京）などが設立された。金陵女子大学は一二年にアメリカの八つの教団が連合して創設した大学で、現在は南京師範大学となっている。[15] 第一期卒業生の呉貽芳はアメリカのミシガン大学で生物学の博士号を取得した後帰国し、二八年に母校の校長となったが、それは中国で初の女性校長の誕生であった。

このように中国における近代的女子教育は、まさにキリスト教の教会学校から始まったと言えるのである。

三　鄧裕志の生涯と思想

(一)　YWCAとの出会い

鄧裕志（字は裕芝、号は康、筆名雨枝、英語名Cora Deng）は、一九〇〇年に湖北省沙市の地主兼工商業者の由緒ある家庭に生まれた。[16] 父親は清朝の官吏を務めていた

が早逝し、鄧裕志は八歳の時に当時開明的雰囲気を備えていた湖南省長沙市の祖母の元へ移転した。そして長沙の私塾で『三字経』等を学んだ後、新式教育学校の周南女校と福湘女子中学に入学した。福湘女子中学在学中は、五四運動時にデモ行進に参加し、その経験の中で鄧裕志は、新しい思想というものの薫陶を受けることとなったという。[17]

実際に鄧裕志は、自身で自分の纏足を解いたり、「鄧裕芝」という元の名前を「鄧裕志」に変えたり、早くから決められていた封建的結婚を、勉学と仕事への志を貫くために解消している。[18]鄧裕志は特に貧しい人々の生活改善という問題に関心を抱くようになり、そうした社会活動への志の前に、新たな人生が切り拓かれていった。

両親の死後、祖母がクリスチャンとなり、鄧裕志自身も一四歳の女子中学生の時にYWCAと出会った。鄧裕志はその頃の心情を、「女性が〝三従四徴〟や纏足等の痛苦に遭っているのを目の当たりにして、中国女性のための仕事を行うという意識がより強くなった。YWCAで私たちは、女性教育は私たちが必ずやらなければならない最も重要な仕事であると認識するに至った」[19]と述懐している。

そして一九二〇年に南京の金陵女子大学に入学すると社会学を専攻した。授業の一環として社会調査に携わり、卒業論文「南京の錦織工場の生産状況と労働者の生活福利闘争状況の調査」をまとめている。[20]鄧裕志はこの調査経験によって、労働者たちの悲惨な境遇に対してさらに同情と関心を寄せるようになっていったのである。[21]二三年から学生幹事等としてYWCAの仕事に関わるようになった鄧裕志に大きな影響を与えたのは、当時長沙YWCAのアメリカ人幹事であったモード・ラッセルだった。ラッセルの革命思想や労働運動に関する紹介を通して、労働者階級への関心が一層深まった[22]鄧裕志は、長沙YWCAの知育部幹事を務めるようになり、識字班を開いて女工たちに教えるといった活動を経験している。[23]

そして一九二五年からは金陵女子大学の自治会主席も務め、さらに実践活動を重ねていった。それは「学生と接触し、社会を理解し、仕事の能力を鍛え、社会事業に献身する精神を養うための実践の機会を提供してくれた」[24]のであった。やがて二六年に金陵女子大学を卒業すると、鄧裕志はYWCAの仕事に専念するようになる。そしてその活動は終生変わることなく継続されることとなった。

(二) YWCAでの活動

鄧裕志は一九二六年から亡くなる九六年まで、幹事、全国協会総幹事等として七〇年にわたってYWCAの活動に従事した。その職位をたどると、二七年の全国協会の学生部幹事を始めとして、翌二八年には全国協会校会部幹事、同年九月には念願の全国協会労工部幹事となり、三七年か

らは労工部の責任者である主任幹事を務めた。[25] そして五〇年には全国協会総幹事に就任して、名実共に中国ＹＷＣＡの代表となったのである。鄧裕志のこの長期間のＹＷＣＡでの活動の中でも、労工事業と抗日救亡・救国運動はその代表的なものであり、それらについて触れてみたい。

労工事業は中国ＹＷＣＡの様々な活動の中でも、最も早期に取り組まれたものであり、一九二〇年代前半には労働立法の働きかけ、女工ストライキの支援等を行った。しかし二〇年代後半からは教育に重点が移ると、[26] アメリカ人幹事のリリー・ハース、タリサ・ガーラック、そして鄧裕志等が中心となって女工夜間学校が開設・運営されることとなった。[27]

その活動が最も活発だった上海を例に挙げると、二六年に二つの女工平民教育班が設置され、二八年までに市内の四カ所に平民学校が成立して、タバコ工場や紡績工場等の女工約二百人が識字や生活常識などを学んだ。[28] そして三〇年にはＹＷＣＡ女工夜間学校と正式に名称を定め、[29] 三六年には上海ＹＷＣＡ管轄の学生は一四〇〇人に達した。[30]

また授業では陶行知、金仲華、章乃器、王汝祺、陳彬和、馮玉祥らが招かれて講演を行うこともあり、[31] 多彩なカリキュラムを学んだ学生たちの中からは、後に労働運動に積極的に参加する者たちも生まれたのだった。鄧裕志は労工事業の意義について、女性たちが家庭から社会へ出て行くようになり、家庭生活以外に同性同士の団体生活が生まれている状況を鑑み、各界の女性たちの結合・団結が必要であるからだと説明しているが、[32] こうした成果は、まさにその期待が実現したことを意味していた。

一九三一年に九・一八事変が勃発すると、ＹＷＣＡも抗日救亡運動に参加し、三七年の抗日戦争後は、経常活動と共に積極的に抗日活動を展開していった。

鄧裕志自身も一九三五年には何香凝、史良、陳波児等の女性指導者たちと上海婦女界救国連合会を、翌年には陶行知、呉耀宗、劉良模、沈体蘭たちと国難教育社を設立した。[33] 抗戦期には、ＹＷＣＡ全国協会が上海の「孤島化」の中で、国民政府移転後に抗日の拠点となった漢口に事務所を開くことを決定し、三七年一一月に鄧裕志等が派遣されたが、そこで周恩来・鄧頴超夫妻との交流を持つこととなった。[34] そして三八年には、抗戦期の女性の統一戦線実現を促した廬山婦女談話会に、ＹＷＣＡを代表して出席している。[35]

さらに一九三八年一二月から四二年まで、ＹＷＣＡ全国協会は交換幹事として、鄧裕志をアメリカへ派遣することとなった。その目的は中国の戦時活動と抗日闘争が正義の戦いであることを宣伝することにあり、鄧裕志は三〇余りの都市と農村のＹＷＣＡを訪れローズヴェルト大統領夫人とも会見している。[36] さらにこのアメリカ滞在中、鄧裕志は

ニューヨーク大学の大学院で学び、修士論文「上海三六〇人の紡織女工の経済的地位の調査」を書き上げている。[37] その他にも三九年にはジュネーヴの世界YWCA委員会とILO大会にも出席して、中国の抗日戦争の状況と抗日戦争における女性の貢献について詳細な報告を行っており、[38] 鄧裕志はまさに国際的な抗日宣伝の役割を果たしたのであった。

(三) 人民共和国期の鄧裕志

中国に社会主義政権が誕生すると、鄧裕志は女性運動とキリスト教界の指導者として活躍し、数々の国家の公職も歴任した。こうした活動を通して鄧裕志が求めていったものは何だったのだろうか。

人民共和国建国直前の一九四九年九月に開催された中国人民政治協商会議第一期全体会議に、鄧裕志は宗教界代表八人のうち唯一の女性として参加した（当時鄧はYWCA全国協会労工部主任幹事）。[39] 鄧裕志たちは「共同綱領」草案作成に関わり、「宗教信仰の自由権」が規定されたが、[40] その過程で共産党への信頼もより深まっていったという。会議後代表たちは各地のキリスト教団体に対して、政協会議は統一戦線の現われであり、その統一戦線はキリスト教界も含むといった説明が行われ、鄧裕志もキリスト教は西洋から伝来したものだが、現在は中国化したキリスト教であるべきことを強調している。[41]

こうしてキリスト教界全体が共産党を中心とする統一戦線の一部として公式化される中で発動されたのが、三自愛国運動であった。一九五〇年から始まったこの運動は、帝国主義に利用され中国侵略の道具とされてきたキリスト教は、人々との間に溝を生み各種の困難に遭遇していると認識したキリスト教者たちが、自身の努力によって帝国主義のコントロールから脱して、独立自主で自弁の教会をもつ中国のキリスト教の実現をめざしたものだった。[42] そして鄧裕志は呉耀宗と劉良模と共に、この〝自治自養自伝〟を掲げる三自愛国運動の発起人の一人として名を連ね、後にはこの運動が発展した中国基督教三自愛国運動委員会常務委員、副主席、顧問を務めている。[43]

中国YWCAは清朝末期の一八九〇年に設立され、現在も

中国人民政治協商会議第一期全体会議に宗教界代表の一人として出席した鄧裕志（前列左端）

晩年の鄧裕志

オーストラリア、ノルウェーの訪問客と一緒の鄧裕志（左から２人目）（1958年）

その活動は続いている中国屈指の歴史をもつキリスト教団体であり、一九四九年の社会主義革命によっても消滅することはなかった。そして鄧裕志のＹＷＣＡにおける活動は人民共和国期にも続き、五〇年からは中国ＹＷＣＡ全国協会総幹事に就任し、遂に中国ＹＷＣＡ全体の頂点に立つこととなったが、その在任期間は、実に四二年に及んだ（九二年九月からは名誉総幹事）[44]。そしてＹＷＣＡも海外のミッションとの関係を一切絶ち、三自愛国運動への参加によって〝反帝愛国〟の立場から統一戦線を支持する存在となり、中華全国婦女連合会の団体会員となるなど、その性格はかつてと大きく変わっていった[45]。

こうして女性運動とキリスト教界の代表的指導者として、〝愛国的クリスチャン〟を体現した鄧裕志は、全国人民代表大会代表、全国政治協商会議委員、全国婦女連合会常務委員といった公職を歴任して、各地を精力的に視察し、外国訪問や国際会議への参加を精力的にこなしていった[46]。そして反右派闘争も強く支持した鄧裕志であったが[47]、文革中にはＹＷＣＡの活動は全面的に停止して重大な損害を蒙り、自身もスパイ容疑をかけられたという[48]。

そして一九九六年一〇月一日、鄧裕志はその九六年の長い生涯を閉じたのである。

おわりに

鄧裕志の生きた九六年という時間は、激動の中国の近現代の歴史とぴったりと重なり、その生涯をたどることは、とりも直さず中国自身の歩みを今一度確認することとなるだろう。

若い頃から勉学と仕事への志を堅持し、貧しい人々、とりわけ女性たちの状況を変えたいという思いを抱く中で、鄧裕志はYWCAと出会った。そして労工事業に携わる中で女工夜間学校の開設・運営の中心人物として活躍し、抗日救亡・救国運動では、海外への抗日のアピール活動において、自身の特性を存分に発揮することになった。

人民共和国が建国されると、女性運動とキリスト教界の指導的立場に立ち、数々の公職を歴任した〝愛国的クリスチャン〟の鄧裕志は、まさに「新中国」の表の顔として、大いに喧伝されたことだろう。

しかし不明な点もまだ多い。例えば社会主義国家における宗教、キリスト教の問題について、鄧裕志は「キリスト教の中国化」の重要性を強調し、共産党への信頼を示し、「帝国主義」に対する強い警戒の念を抱いていた。しかし文革中にはスパイの嫌疑をかけられたこともあった。クリスチャンであり豊富な国際経験をもっていた鄧裕志が、文革中に厳しい状況にあったことは想像にかたくない。当時の明確な宗教弾圧の状況を、鄧裕志は果たしてどう見ていたのだろうか。その点に関連して、四九年前後の共産党の宗教政策とクリスチャンたちの反応と動向を整理しておくことが必要であろう。中国の近現代史をより包括的に再構築してゆくためにも、キリスト教研究の今後のさらなる発展と深化が要請される。その担い手の広がりを期待したい。

最後に、現在の中国のキリスト教の状況に関連して、一つの記事を紹介したい。それは、プロテスタントの中国伝来二〇〇周年に当たる今年、初来日した中国基督教三自愛国運動委員会主席季剣虹の言葉を伝えたものである。記事は、「調和のある社会」の建設をめざす中国政府は、宗教界にも協力を求めているとした上で、「中国の現実に合った独自の神学思想の建設が重要な使命。障害者支援や、貧困家庭の援助など社会奉仕活動に力を入れています」という季剣虹の言葉を紹介している[49]。現在の中国社会におけるキリスト教のあり方について、キリスト者自身の模索が続いているのである。

注

〈1〉 章開沅主編、孫海英編著『教会大学在中国　金陵百屋

房――金陵女子大学』河北教育出版社、二〇〇四年の章開沅「総序」と編著者「後記」を参照。

〈2〉何建明「〝基督宗教来華与中西文化交流〟学術研討会総述」章開沅・馬敏主編『基督教与中国文化叢刊』第六輯、湖北教育出版社、二〇〇四年。

〈3〉顧長声『伝教士与近代中国』上海人民出版社、一九八一年、顧衛民『基督教与近代中国』上海科学院出版、一九九五年、陶飛亜『辺縁的歴史――基督教与中国近代』上海古籍出版社、二〇〇五年、教育に関する研究については、周洪宇・張雲芳「中国教会教育史研究文献要目（一九六一―二〇〇三）」（同右『基督教与中国文化叢刊』第六輯所収）を参照。

〈4〉上海社会科学院歴史研究所所長の熊月之は、帝国主義侵略の象徴である租界が、同時に外国文化受容の窓口としての重要な機能を備えていたことに注目して、租界のもつ両義性を先駆的に指摘したが、こうした具体的な歴史の中に租界の果たした役割を実証的にとらえようとする姿勢は、キリスト教を評価する場合にも不可欠であろう。

〈5〉以下の記述は、阮仁沢・高振農主編『上海宗教史』上海人民出版社、一九九二年、張化『上海宗教通覧』上海古籍出版社、二〇〇四年による。

〈6〉張化、前掲書、四三五頁、四九三頁。

〈7〉イギリスロンドン会が設立し、現在も上海市中心部の山東路で営業している。一九四一年から四五年まで、同病院は日本軍によって接収された。ちなみに筆者の伯母は四四年から看護婦としてここで働いていたことがある（四六年に帰国）。

〈8〉程謫凡『中国現代女子教育史』中華書局、一九三六年、廬燕夏『中国近代女子教育史』台北：文史哲出版社、一九八九年、雷良波等『中国女子教育史』武漢出版社、一九九三年、佐藤尚子『米中教育交流史研究序説――中国ミッションスクールの研究』龍渓書舎、一九九〇年、末次玲子「辛亥革命期の婦人解放運動とプロテスタント女子教育（上）（下）」『歴史評論』二八〇、二八一号、一九七三年九月、一〇月等。

〈9〉Nancy Boyd, *Emissaries: The Overseas Work of the American YWCA 1895–1970*, New York: The Woman's Press, 1986 等。

〈10〉「前言」陶飛亜編『性別与歴史――近代中国婦女与基督教』上海人民出版社、二〇〇六年。なお、同シンポの主催は上海大学とカリフォルニア大学サンフランシスコ校マテオ・リッチ中西文化歴史研究所である。同シンポの報告論文をまとめた同書は、中国国内の関係機関の人々によって組織された「キリスト教と中西歴史文化」学術委員委員会と、マテオ・リッチ中西文化歴史研究所が合同で取り組んでいる「キリスト教と中西文化歴史系列研究計画」の成果の一環として刊行された。また、この「キリスト教と中西歴史文化」学術委員委員会の主任は、前述の章開沅と卓新平（中国社会科学院世界宗教研究所キリスト教研究センター所長）が務めている。

〈11〉纏足と反纏足運動については、「纏足」「反纏足運動」

（関西中国女性史研究会編『中国女性史入門――女たちの今と昔』人文書院、二〇〇五年）、「不纏足運動」（中国女性史研究会編『中国女性の一〇〇年――史料にみる歩み』青木書店、二〇〇四年）、岡本隆三『纏足物語』東方書店、一九八八年、夏暁虹著、清水賢一郎・星野幸代訳『纏足をほどいた女たち』朝日新聞社、一九九八年、ドロシー・コー「中国の衣服と体のイメージ――一六世紀から一九世紀におけるヨーロッパ人の旅行記から」（中国女性史研究会編『論集 中国女性史』吉川弘文館、一九九九年）、同著、小野和子・小野啓子訳『纏足の靴――小さな足の文化史』平凡社、二〇〇五年、坂元ひろ子『中国民族主義の神話――人種・身体・ジェンダー』岩波書店、二〇〇四年、東田雅博『纏足の発見』大修館書店、二〇〇四年、馮驥才著、納村公子訳『三寸金蓮』亜紀書房、一九八八年を参照。

〈12〉 注〈8〉の各文献と、「女学校の誕生」（関西中国女性史研究会編、前掲書）、「キリスト教と女性」（中国女性史研究会編、前掲『中国女性の一〇〇年』）を参照。

〈13〉 王治心撰、徐以驊導読『中国基督教史綱』上海古籍出版社、二〇〇四年、二七〇頁。

〈14〉 中西女塾編『中西女塾章程』上海永興印書館、一九二二年、参照。

〈15〉 金陵女子大学については、章主編、孫編著、前掲書と、張連紅主編『金陵女子大学校史』江蘇人民出版社、二〇〇五年を参照。

〈16〉 鄧裕志の経歴については、鄧裕志「難忘的歳月」、鄧述慈「追求社会進歩与平等的一生――緬懐世紀老人鄧裕志先生」『鄧裕志先生紀念文集』（中華基督教女青年会全国協会、二〇〇〇年（非売品））、近渓「訪鄧裕志女士」『婦女』一九八三年第五期、一九八三年五月、Emily Honig, "Christianity, Feminism, and Communism: The Life and Times of Deng Yuzhi," Daniel Bays ed., *Christianity in China: From the Eighteenth Century to the Present*, California: Stanford University Press, 1996, 石川照子「上海のＹＷＣＡ――その組織と人のネットワーク」日本上海史研究会編『上海――重層するネットワーク』汲古書院、二〇〇〇年を参照。

〈17〉 鄧裕志、前掲「難忘的歳月」一六五頁、近、前掲文、三〇頁。福湘女子中学では、後に毛沢東の妻となった後輩の楊開慧と交流があったという（鄧裕志「毛沢東影響我一生」前掲『鄧裕志先生紀念文集』一六八頁）。

〈18〉 近、前掲文、鄧述慈、前掲文、一八〇―一八一頁。

〈19〉 方舟「寄語連合国第四次世界婦女大会」前掲『鄧裕志先生紀念文集』一五四頁。

〈20〉 鄧裕志、前掲「難忘的歳月」一六四頁。

〈21〉 近、前掲文、三〇頁。

〈22〉 Honig, *op. cit.*, p. 251–252.

〈23〉 鄧裕志、前掲「難忘的歳月」一六五頁。

〈24〉 同右。

〈25〉 中国ＹＷＣＡ全国協会機関誌『女青年』の「協会消息」等の各記事による。

〈26〉 鄧裕志は労工事業が開始された一九〇三年から三一年までを四つの時期に分け、第三期（二六－三〇年）において各種の教育活動が行われるようになったとしている（鄧裕志「藍三角形下的労工事業」『女青年』第十期第四号、一九三一年四月、七八頁）。

〈27〉 石川、前掲論文、二七一頁。なお、鄧裕志は一九二九年からＹＷＣＡの派遣でロンドン大学経済学院に留学し、工場立法・労働者教育・経済制度について学び、三〇年前後には、『女青年』誌上に労工関係の記事を精力的に掲載している。

〈28〉 鄧裕志「上海基督教女青年会女工夜校」前掲『鄧裕志先生紀念文集』一五頁。

〈29〉 同右、一六頁。

〈30〉 「労工部工作統計」『上海基督教女青年会三十週年紀念特刊』上海基督教女青年会、一九三八年。

〈31〉 劉作忠「鄧裕志――奮戦在抗日救亡洪流中的勇士」『中国宗教』二〇〇四年第五期、二〇〇四年五月、二〇頁、鄧裕志、前掲「上海基督教女青年会女工夜校」一九頁、鄧裕志「我所認識的傑出的人民教育家陶行知先生」前掲『鄧裕志先生紀念文集』一五八頁。

〈32〉 鄧裕志、前掲「藍三角形下的労工事業」七五頁。

〈33〉 劉作忠、前掲文、二〇頁、前掲「我所認識的傑出的人民教育家陶行知先生」一五八頁。

〈34〉 劉作忠、同右文、二〇－二一頁、鄧裕志「抗戦期間的中華基督教女協会」『人民政協報』一九八六年一〇月七日。

〈35〉 鄧裕志、同右文、鄧裕志「難忘的抗戦第一年――従上海、武漢到大後方参加活動片断回憶」前掲『鄧裕志先生紀念文集』一一－一二頁。

〈36〉 劉作忠、前掲文、二一頁、前掲「抗戦期間的中華基督教女協会」、鄧述慈、前掲文、一八二頁。

〈37〉 鄧述慈、同右文。

〈38〉 《上海婦女誌》編纂委員会編『上海婦女誌』上海社会科学出版社、二〇〇〇年、六一〇頁。

〈39〉 八人の中でキリスト教界からは他に呉耀宗、張雪岩、趙紫宸、劉良模の計五人が参加した（鄧裕志「建設中国化的教会――宗教界在一届政協会議上」『人民政協報』一九八九年八月二五日。前掲『鄧裕志先生紀念文集』にも所収）。

〈40〉 同右。

〈41〉 同右。

〈42〉 同運動発起の経緯については、鄧裕志「中国基督教会的新路（摘要）」、彤人「訪三自元老之一鄧裕志先生」前掲『鄧裕志先生紀念文集』を参照。

〈43〉 《上海婦女誌》編纂委員会編、前掲書、六一〇頁。

〈44〉 鄧裕志、前掲「難忘的歳月」一六七頁。

〈45〉 鄧裕志「在中国婦女第三次全国代表大会上的発言」前掲『鄧裕志先生紀念文集』二三－二四頁。

〈46〉 一九五〇年にはワルシャワの第二期世界平和大会に参加し、帰路ソ連を訪問。五三年にはコペンハーゲンの世界

女性大会に参加し、再びソ連を訪問している（鄧裕志「訪蘇回憶――為慶祝蘇聯十月社会主義革命三十五周年而作」、鄧裕志「婦女与和平」、鄧裕志「莫斯科―北京――為慶祝蘇聯十月主義革命三十六周年而作」同右書）。

〈47〉鄧裕志「有関基督教方面的三点意見」『人民日報』一九五七年七月一八日。同右書にも収められているが、文章が改変されている。鄧裕志は同文中で、右派分子と共に「帝国主義」に対する以下のような強い警戒の姿勢を示している。「帝国主義は中国のキリスト教三自愛国運動に対してあきらめてはいない。彼らはずっと中国には宗教信仰の自由はない、あるいは表面的な宗教信仰の自由があるのみだと歪曲して述べている。……帝国主義のこれらの陰謀は、単に新中国とかつて彼らの〝勢力範囲〟だったその他の多くの国々のキリスト教をコントロールし続けようとするのみならず、彼らの転覆活動と直接関係するものなのである」。

〈48〉鄧裕志「基督教女青年会在中国九十七年（一八九〇―一九八七）」前掲『鄧裕志先生紀念文集』三六頁、鄧述慈、前掲文、一八〇頁。

〈49〉『朝日新聞』二〇〇七年五月一二日、朝刊。

参考文献

〈日本語〉

関西中国女性史研究会編『中国女性史入門――女たちの今と昔』人文書院、二〇〇五年。

佐藤尚子『米中教育交流史研究序説――中国ミッションスクールの研究』龍渓書舎、一九九〇年。

末次玲子「辛亥革命期の婦人解放運動とプロテスタント女子教育（上）（下）」『歴史評論』二八〇、二八一号、一九七三年九月、一〇月。

中華全国婦女連合会編著、中国女性史研究会編訳『中国女性運動史　一九一九～四九』論創社、一九九五年。

中国女性史研究会編『中国女性の一〇〇年――史料にみる歩み』青木書店、二〇〇四年。

日本上海史研究会編『上海――重層するネットワーク』汲古書院、二〇〇〇年。

山本澄子『中国キリスト教史研究――プロテスタントの「土着化」を中心として』近代中国研究委員会、一九七二年。

山本澄子『中国キリスト教史研究　増補改訂版』山川出版社、二〇〇六年。

〈中国語〉

『女青年報』『女青年』中華基督教女青年会。

王治心撰、徐以驊導読『中国基督教史綱』上海古籍出版社、二〇〇四年。

阮仁沢・高振農主編『上海宗教史』上海人民出版社、一九九二年。

顧衛民『基督教与近代中国』上海科学院出版、一九九五年。

顧長声『伝教士与近代中国』上海人民出版社、一九八一年。

張化『上海宗教通覧』上海古籍出版社、二〇〇四年。

陶飛亜編『性別与歴史——近代中国婦女与基督教』上海人民出版社、二〇〇六年。
『鄧裕志先生紀念文集』中華基督教女青年会全国協会、二〇〇〇年（非売品）。
〈英語〉
Emily Honig, "Christianity, Feminism, and Communism: The Life and Times of Deng Yuzhi," Daniel Bays ed., *Christianity in China: From the Eighteenth Century to the Present*, California: Stanford University Press, 1996.
Nancy Boyd, *Emissarie: The Overseas Work of the American YWCA 1895–1970*, New York: The Woman's Press, 1986.